

戦国の世を駆け抜けた、甲賀忍者。

甲賀市は甲賀忍者のかくれ里。
伝説の猿飛佐助は甲賀忍者だったという。
武将たちの天下取りの裏舞台で生きた忍者の世界へ。



中世



甲賀忍者(甲賀武士)発祥の地

中世の時代、地域の支配権力を強めようとしていた甲賀の土豪(半農半武の有力農民)たち。長享元年(1487)に室町幕府將軍足利義尚が本陣を構えた「鉤の陣」(現在の栗東市)を夜襲し、その時功績のあった武士が六角氏から感謝状を受け、「甲賀武士五十三家」あるいは「甲賀二十一家」と呼ばれました。甲賀武士団は甲賀忍術集団とも呼ばれ、その後も奇抜な手法で全国の各藩で活躍し、戦乱の世を生き抜いたと語り継がれています。各家の名字の多くは現在の甲賀地域各地の地名になっています。

一歩入ればそこは忍びの世界。甲賀の里「忍術村」には広大な山林に甲賀武士の住居を移築した忍術屋敷、忍術博物館、手裏剣道場などが点在し、当時の隠れ里が再現されています。忍術屋敷の外観は一般的な日本家屋ですが、内部には吊り天井や抜け穴など様々な細工が施されています。また、甲賀五十三家の有力者望月家の住居が「甲賀流忍術屋敷」として公開されており、こちらでも忍者体験を楽しむことができます。



△甲賀流忍術屋敷[甲南町]



△甲賀の里忍術村[甲賀町]



東海道宿場町、人と文化が行き交った。

近世

参勤交代の大名や武士、伊勢詣りの旅人、そして芭蕉などの俳人が通った東海道。当時のたたずまいを残す道筋は今も優しく旅人を迎えてくれます。



△水口・横田渡常夜灯



△土山宿東海道伝馬館



△水口曳山祭

江戸時代の旅人気分で……。

慶長5年(1600)、天下分け目の戦い「関ヶ原の合戦」で勝利した徳川家康は翌年、江戸と京都を結ぶ重要な街道として東海道を五十三の宿場を設け「東海道五十三次」を開設しました。現在の甲賀市には「土山宿」と「水口宿」が設けられました。

土山宿は街道の難所と言われた鈴鹿峠を行き来する旅人の休憩場所となりました。水口宿は徳川三代將軍家光の宿館として築城された水口城の城下町としても整備され、「街道一の人の留め場」といわれるほどのにぎわいを見せました。享保20年(1735)、町民がまちの発展を願って曳山を建造し、水口神社に奉納しました。これが「水口曳山祭」の始まりだと伝えられています。(P28参照)旧東海道を歩けばこの曳山を収納している「山蔵」を見ることができます。

天保3年(1832)に浮世絵師の第一人者、安藤(歌川)広重は各宿場町の風景を描きました。

広重が描いた「東海道五十三次」



△水口「かんびょう干し風景」



△土山「春の雨」

土山「春の雨」

「坂は照る照る鈴鹿は曇る、あいの土山雨が降る」鈴鹿峠を往来する旅人や馬子たちが口ずさんだ鈴鹿馬子唄。鈴鹿峠を境に天候が変わることからこう歌われたのでしょうか。広重はこの一節を思い浮かべてか「春の雨」と題して大雨の中を大名行列が川を渡る様子を描いています。

水口「名物かんびょう」

水口かんびょうは東海道五十三次の浮世絵に、広重が「かんびょう干し風景」を描いてから一躍有名になりました。水口の初夏の風物詩といえば、青空の下、白いかんびょうが干される風景に尽きるといわれています。俳人 松尾芭蕉も「夕顔に かんびょうむいて 遊びけり」とうたっています。

